和歌山市の小規模校園での地震防災教室・避難訓練の実践事例

Case Study of Earthquake Disaster Prevention Class and Evacuation Drill of Small Elementary School and Kindergarten in Wakayama City

山　田　伸　之　　丁　子　かおる
YAMADA Nobuyuki　　CHOJI Kaoru
（高知大学理工学部）　（和歌山大学教育学部）

2022年７月12日受理

抄録

In this report, a) disaster prevention class, b) earthquake response drill using the earthquake early warning system, c) tsunami evacuation drill, d) an integrated approach of a) through c), d) collaborative connection between a small kindergarten and an elementary school, and e) disaster prevention activities that are aware of the "collaborative connection between small kindergarten and elementary school" adjacent to each other at Elementary School and Kindergarten in Wakayama City in 2020 and 2021. In addition, future issues was extracted from the results of a post-practice questionnaire to the children, teachers and parents.

キーワード：和歌山市、防災教育、避難訓練、小規模校園、幼小連携、アンケート

１．はじめに

2011年東日本大震災以降、学校を中心にした防災教育に関する実践や研究事例は増加［例えば、防災教育実行委員会[1]］し、ここ数年でその拡充がさらになされている［例えば、文部科学省[2]］。反面、幼児を対象にした事例は少なく、著者らは、これまでに各種園での乳幼児と保育者・保護者らに向けた地震防災教室と保育を併せ付す防災保育の実践活動［例えば、山田・丁子[3]］を行ってきた。本報告は、著者らの幼児教育でのノウハウをベースに、2020年と2021年の津波防災の日（11月５日）に和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園（併設）で実施した防災教室と避難訓練の取り組みと実践後のアンケート結果について紹介する。この研究では、⑴海沿いに立地する園・学校での行事の一つとして位置付けられる「防災教室」、⑵市の行政無線から発せられる「緊急地震速報を利用した地震時対応訓練」、⑶その直後の「津波避難訓練」、⑷⑴～⑶を一体化した取り組み、⑸互いに隣接する「小規模な幼稚園と小学校の連携接続」を意識した防災活動の取り組み、について注目したものである。なお、本文中の写真は2021年に実践した時のものである。

２．和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園について

今回の実践事例の対象校である和歌山市立雑賀崎小学校と幼稚園は、それぞれ1876年と1971年に創立され、和歌山市南部の市街地からは５㎞ほど離れた海あり山ありの自然に恵まれた閑静な地域に立地する。当該校園は、図１ａ［国土地理院[4]］に示すように、水軒川河口付近の標高２～３ｍの位置に立地し、南側と西側を50～100ｍ程度の低山に囲まれ、起伏に富んだ地形の地域である。紀伊水道の外海に面してはいないが、南海トラフ巨大地震の際の津波浸水区域内にある［和歌山市危機管理局[5]］。また、1988年完成の３階建ての小学校校舎は、1981年の新耐震基準法施行後の竣工であり、和歌山市[6]の資料によれば、耐震改修は実施済となっている。

校区は、西浜・雑賀崎・田野地区で、幼児・児童らは、山間の通学路を通って登下校している。校区周辺地域の人口減少により、児童・幼児数も減少傾向にあり、現在は、幼児・児童総数50名程度の小規模校園となっている。

この小学校と幼稚園は、隣接するため、定常的に幼小は連携しているが、防災等に関わる一連の活動については、実施機会が少なく、本報告のような機会が望まれていた。なお、２年連続の実践に至る経緯は、2020年の実施後、高学年児童たちより防災教室を再びとの要望があったことから、校園長を通じた依頼によるものでもある。

３．防災教室について

１）事前学習（事前の練習・準備活動など）

11月５日の津波防災の日の訓練（本実施）を前に、事前学習をしてもらった。関連行事の事前案内に相当するが、小学生にとっては、「津波防災の日」の意義を考

える機会になるとともに、防災教室の実施者側に立つ者としての自覚や意識づけとその準備をするきっかけにもなったといえる。特に、高学年の児童らへは、予め「防災教室のお手伝いをしてもらう（例えば、表１②のダンスでは、下級生のお手本になってもらうなど）」旨を伝えていた。それによって、高学年児童らは、放課後等に自主的に集まり、ダンスの練習をしていたという。なお、ダンスの内容については、大学生が事前に収録した動画を送り、参考にしてもらった。これらのことは、前年の防災教室に参加した際のイメージから防災教室への協働を考えていたことが分かる姿であった。

幼稚園児に向けては、防災教室開催にあたって、表１①の防災劇に登場する動物たちが園に来るといった形で期待感を膨らませるアナウンスをしてもらった。また、「教室から園舎屋外への避難訓練」と「園外への２次避難訓練」のための事前練習を行った。写真１左は、防災頭巾を取りながら順次教諭に続いて教室を出る場面であり、通常の訓練と似た光景である。ただ、この時は、防災頭巾だけでなく、感染防止のためのマスクをつけての行動になり、夏場には暑さ対策を要すると思われる。写真１右では、さらに園庭から２次避難の事前練習をしている場面である。幼児たちは、園庭への避難訓練の経験はあっても、園外への訓練の経験は少ないため、訓練本番への恐怖心を軽減化するためにも、また、問題点の抽出や経験の積み重ねのためにも、事前練習と称した訓練も、園児に対しては、「慣れ」のためにも回数を重ねることや、事前練習や訓練本番の機会のみならず、日常的にも繰り返すことが必要である。

写真１　事前練習の様子（左：園舎外への避難、右：２次避難場所への移動）［幼稚園教諭提供］

２）「防災教室」の本実施について

小学校体育館で実施した防災教室の内容の概要について表１に示す。これは、これまでに乳・幼児や児童等を対象にしてきたもの［例えば、山田・丁子（2021）[3)]］を活用した。体感や児童・幼児の相互の関わりあいを交えた各種防災体験ツールを活用し、その中では、ペープサートの劇を見たり（写真２）、歌とダンスを交えて身を守るための姿勢例を学ぶとともに恐怖心を減らしたり（写真３）、揺れや煙・暗闇などを体験したり、危険物から回避したりする活動をコースのアトラクションとして用意し（写真４）、それらを１つずつ乗り越えていくように設定した。一連の各種の体験活動などは、子どもの発達過程や発達段階に合わせて揺れの強さや（表１下（あ））（同（い））、暗闇の暗さ（同（お））、サンゴ砂利の配置（同（う））など、避難の妨げとなり得る障害物を避けることの困難さを変更して設定した。それらについては、幼児も児童もほぼすべての子どもたちが取り組むことができていた。

また、高学年の児童らには、単に体験活動に参加するだけでなく、みずから防災教室を展開する一員として、環境の調整や設置、教員のサポートという役割と、下級生の児童や幼児たちに見せる・教える活動にも加わってもらった。それによって、当日には、アトラクション参加に戸惑う幼児・児童への励ましや支援を自主的に行う高学年児童の姿がみられた。上級生としての自覚を持てるだけでなく、こうした上級生が低年齢児を導く経験や成功体験から率先して防災活動を継続的に取り組んでいけるようになると考えられる。これらの試みは、小規模校ゆえに実行できるものともいえる。また、教員志望大学生の参加によって、学生への教職への意識向上や教員との協働する体験にもなっている。

表１　（上）防災教室の概要　（下）③の中身

①ペープサートによる劇と話➡内容理解
②歌とダンス➡対応行動例の体得（恐怖心の軽減）
③被災想定のコースを体験➡体験的理解
④ゴール：参加証カード➡家庭教育との連携
⑤振り返り➡印象付け：自らの学びへ繋ぐ

（あ）：ぐらぐら台：揺れの模擬体験
（い）：ゆらゆら壁：落下物回避
（う）：じゃりじゃり道：足元の危険回避
（え）：もくもくトンネル：煙の空間体験
（お）：まっくらトンネル：暗闇を体験

写真２　ペープサート劇を熱心に見る子どもたち

写真３　みんなでダンスをして恐怖心を軽減（大学生に加え、高学年児童も手本を見せている）

（あ）ぐらぐら台

（い）ゆらゆら壁

（う）じゃりじゃり道

写真４
アトラクションの例
（い）と（う）では、高学年生が幼児・低学年生をサポートしている。

３）振り返り活動（事後学習）

一連の防災教室の活動を実施した後に、その場（体育館）において、「ふり返り活動」も行った。児童らについては、普段から形作られている異学年の縦割り班活動「つみき」を活用し、お互いに振り返りによる防災教室における学んだことや印象に残ったもの、防災について考えていることなど、上級生が司会をして意見交換をした。幼児については、教諭を中心にして、防災教室の振り返りや幼児たちの意見の取りまとめがなされた。写真５は、その際の様子で、普段からの面々で構成される班であるため、活発な話し合いがなされた。こうした活動についても、参加した子どもたちは、子ども間で話し合うことで子ども目線での気付きを増やしたり理解を深めたりすることでき、また、学年が上がるにつれて上級生への憧れから子どもなりの役割理解や個々が主体性を強めていきながら、防災を学ぶ活動の印象づけを強くする効果があると考えられる。これら一連の活動は、子どもたちへの定着だけでなく、今回の経験を家庭に持ち帰って、家庭での話題提供のきっかけにすることもねらったものである。

写真５　振り返り活動の様子

４．地震時対応訓練（緊急地震速報を活用した訓練）

３．で記した一連の防災教室の終了直後、市の防災無線で流される緊急地震速報を利用した避難訓練（地震対応訓練）を実施した（正確には、防災教室の終了を放送時刻に合わせた）。対応訓練の流れは、①緊急地震速報が流れるタイミングを子どもたちには具体的に知らせず、休憩時（幼児・児童がばらばらに園・校舎内にいる状況下）に速報を放送、②地震がおさまったとして、１次避難として運動場に集合する旨の校内放送、③運動場への全員避難、というものである。①では、とっさに身を守る行動をとれるかを確認する機会となる。

写真６は、流れ①の緊急地震速報が流れたときの校内各所の子どもたちの様子を捉えたもので、それぞれ体育館内、校舎外、図書（資料）室のものである。いずれの写真も、①の放送を聞いた瞬間に地震の揺れに対応する身を守ることを意識した行動をとることをしていた。特に、体育館内の様子では、児童らが天井を見て、落下物がありそうな場所から無いところへ移動している姿が見られていた。図書室では、机の下にもぐった後に身を守る姿勢をとっていた。個々の身を守る行動についての評価は別途必要であるが、いわゆる‘抜き打ち’ではあったが、慌てたり、悪ふざけをしたりすることなく、幼児も児童も子どもたちなりに地震対応の行動をとることが試みられていた。この後の流れ②や③については、円滑に１次避難の行動がなされていた。

写真６　緊急地震速報直後の児童らの様子

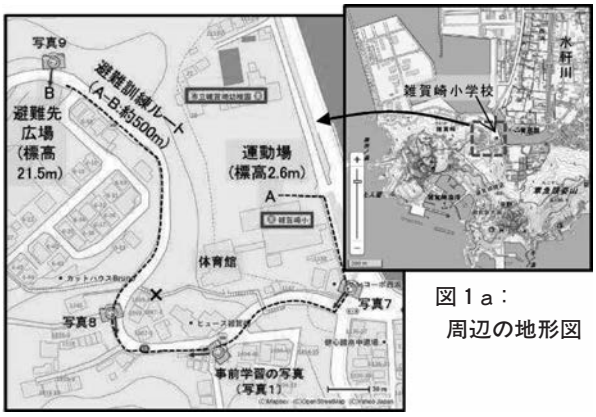

図１ａ：
周辺の地形図

図１ｂ：　学校・園と２次避難ルート、写真の撮影位置

５．津波避難訓練（津波を想定した２次避難）

４．で記した対応行動訓練の後、運動場への１次避難をした後、さらに津波の恐れがあるという想定によ

る２次避難の訓練を引き続き実施した。図１に学校・園の位置と２次避難場所へのルート（点線）等を示す。避難先の高台へのルートは、学校・園正門から自動車等も通行する道路を約500ｍの道で、坂を登っていく道程である。学校敷地内からの最短ルートは、急坂で階段のある両側を塀に挟まれた狭い道である（図１中の×印付近）ため避けられている。避難ルートに使用される道路は、交通量がやや多いだけでなく、道路の片側は崖の斜面であるため、実際の避難時には注意を要する。写真７には、幼児と幼稚園教諭らが避難する様子であるが、信号で止まって待っている。時間的に厳しい事態に遭遇した場合は、このルートについての検討が必要であろう。写真８は、幼児たちに小学生が追いつき、幼児の手をとって避難行動を取る場面である。そこには、遅れがちな幼児も小学生に声をかけてもらいながら手を引かれることで、自ら坂を登って行く姿があった。こうしたことは、日常の生活の中での繋がりがベースとなり、高学年児童らが自らとった行動であり、日常からの幼小連携の望ましい姿がみられた場面でもあると考えられる。

写真７～９　学校から２次避難所への訓練の様子
撮影場所は、図１中に示す

写真９は、高台の避難先に幼稚園児・小学生・教諭らが集合した場面である。小規模校であるために、運動場に集合後、約20分で２次避難場所への移動が完了し、比較的スムーズな避難となった。抜き打ち避難訓練を行ったため時間が長くなり、終盤には、歩き疲れてぐずりだす幼児も現れ、通常の訓練と異なる活動に戸惑う子どもたちの姿も見られた。こうした２次避難については、避難の要不要の判断や避難ルート選定など検討を要する点が散見されたが、教諭らにとっても自らの気付きもみられ、今後の改善につながるものと考えられる。

６．防災教室・避難訓練実施後のアンケート結果

今回実施した防災教室や避難訓練など防災意識の様子や教育的効果の確認のために、保護者向けと教諭向けおよび子どもたち向け（小学生のみ）アンケートも実施した。児童・幼児数の少ない小規模校であるため、母数の小さいアンケート結果となっている点には注意を要するが、およその傾向を把握することはできる。

１）保護者へのアンケート

表２に保護者向けのアンケートの質問内容を示す。2020年と2021年実施分とで質問内容と番号が一部異なるが、ほぼ同じ質問にしている。図２によれば、約８割の家庭で「もしも」のときのことを話し合っていることが示され、地域性もあり、防災への意識がそれなりに高いことを示している。また、図３によれば、学校・園での防災教室実施後に70％程度が家庭内へそれについての話が運ばれていることも分かる。反面、30％は家庭内での話がなされておらず、今回の防災教室について、学校を経由した本アンケートで知った模様である。また、幼児や低学年児には家庭で具体的な話をして伝えることが困難だったかもしれない。家庭での状況は不明だが、学校での出来事が家庭内で話題にあがることの意義は、周知の通りである。この「子どもたちから家庭へ」の流れを形作ることは、子どもたちだけでも、学校だけでもなく、地域社会全体の問題でもある防災教育の性質上、重要であると考えられる。表２中の2020年の問４、５または2021年の問５、６の防災教育の必要性については、ほぼ100％の家庭において肯定的で理解があったようである。こうした傾向は、過去の同様なアンケート結果［例えば、山田・丁子[3)]］とも類似する。ただし、すべて学校・園にお任せという依存性については、普段から学校・園とのつながりがある地域性もあって、ここでは顕著ではない（自由記述欄の内容を加味した判断）。図４には、前年度との意識の比較であり2021年のみの問いである。こうした防災教室の機会が防災への意識向上に結び付いているかを判断する一つの指標になると考えられるが、今回の結果では、４割で地震が起きた時の対応を考えたり話したことが「増加した」と回答している。このことは、単なる一時的な行事に留まることなく、事後学習など少しでも考える時間を増やしたことは、継続性につながり評価できる。さらに家庭内での防災意識の向上・維持を図るには、防災教室にさらなる工夫が必要である。なお、2021年度は感染症拡大防止の観点から家庭

への呼びかけを控えたが、自由記述コメントからは、一緒に防災教室などに参加したかったというものが多かった。

表２　保護者向けアンケートの内容

2020	2021	質問事項　保護者向け
問１	問１	子供の年齢と学年
問２	問２	これまでに地震や風水害などのもしもの時について、家族で話し合ったことがあるか？
問３	問３	学校・園での地震防災教育について、家に帰ってからお子さんから話があったか？ あった場合は、どのような話をしたか？
－	問４	この１年間、家族で「地震」が起きた時やその際の対応について考えたり話したりする機会は、増えたか？
問４	問５	11月５日に実施したような学校・園での防災教育をもっとやった方が良いと思うか？
問５	問６	防災教育を行う際には、家庭と学校・園で連携して行う機会が必要だと思うか？
問６	問７	その他、感想や気付いた点

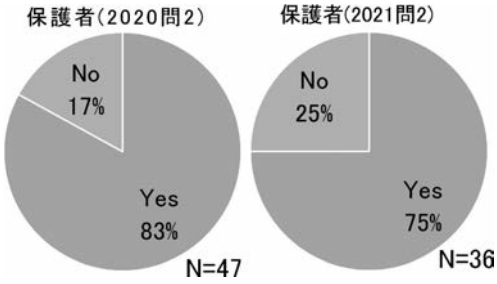

図２　表２中の問２の回答

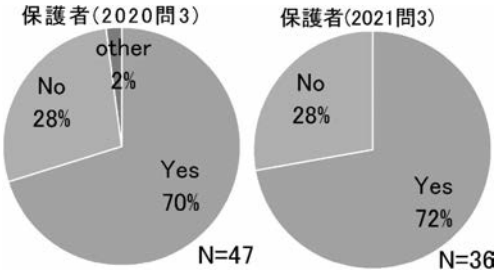

図３　表２中の問３の回答

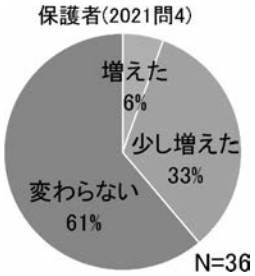

図４　表２中の2021年ー問４の回答

表３　教諭向けアンケートの内容

2020	2021	質問事項　教諭向け
問１	問１	担当の学年・年齢
－	問２	昨年(2020年)の地震防災教室に参加したか？
－	問３	昨年の防災教室から「地震」が起きたときやその際の教職員の対応について考えたり、話したりすることが、増えたか？
－	問４	どのようなことを考えたり話したか？
問２	問５	実施した地震防災教室についての感想や反省点
問３	問６	印象に残ったものは？ある場合、以下から、２つ選び、その理由を。(人形劇、ダンス、ぐらぐら台、ゆらゆら壁、じゃりじゃり道、もくもくトンネル、まっくらトンネル)
問４	問７	体験的な防災教育は、子どもにとって必要か？
問５	問８	今回の地震防災教育でよかったと思うこと、こうした方がいいと思うことは？
問６	問９	その他、感想や気付いた点

２）教諭へのアンケート

表３に教諭向けのアンケートの質問内容を示す。ここでのアンケートは、教諭らの視点から見た一連の防災教室の改善点を抽出することを主眼にしている。特に、2021年の問２～４については、前年度の実施を受けたものとしている。図５は、防災に対する教職員間での議論の変化を問うものであるが、過半数がその機会が増えたと答えており、それなりの意識向上の様子が伺える。図６は、表１下に示すアトラクションのうち、印象に残ったものを２つ挙げてもらった結果であり、年によって差があるが、「ぐらぐら台」は２回とも高い支持を得た。この教具については、体験の困難な事象の模擬を可能にした結果であり、「足元が揺れるとこんなになるとは・・」という予想外の状況が印象に残ったものと考えられる。

表４に教諭アンケートによる自由記述欄で記入してもらった内容の一部を記す。また、そこからの注目点として著者らが箇条書きを付した(右欄)。内容は多岐にわたっており、教員ならではの気付きも見られ、良かった点などの感想のみならず防災教室や避難訓練における改善すべき点も明記されていた。

特に、小規模校や幼小連携ならではの気付きや事前・事後学習についての課題、防災教室実施における時間配分など改善を要する点の指摘があり、全般的に好評を得てはいるものの、いくつかの問題点も浮き彫りになった。よって、これらを今後に活かす必要がある。

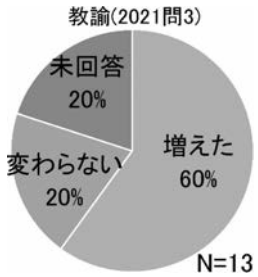

図５　表３の2021年ー問３の回答

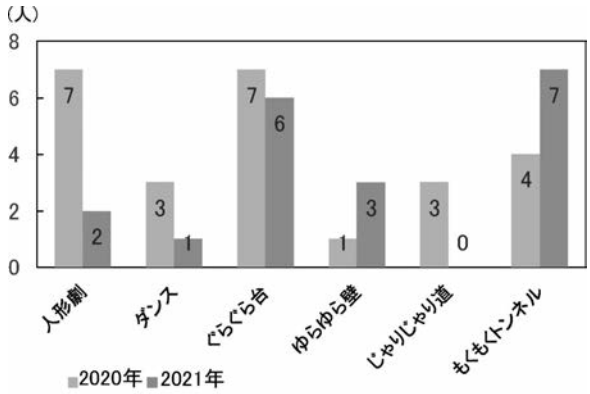

図６　表３の2020年ー問３、2021年ー問６の回答

表４　教諭向けアンケート結果　自由記述から抜粋

教諭のコメント（自由記述）　2020年－問２、５、６、2021年－問４、５、８、９から	注目点
・大変満足でした。幼児にもわかりやすく聞き入りやすい人形劇が導入にあり、具体的な対策を学べ、また体験活動があることで、座学で終わらない、園や学校では簡単にはできないものなので、良かったです。	体験学習の効果
・子どもたちの防災についての知識の高まりを感じた。特に４歳児。（３歳児の時は初めてだった子が昨年のことを思い出す姿が）	似た内容でも反復することの効果
・ダンスにも小学生が協力して前で踊ってくれたりと、子どもたちが主体的に取り組めるようにしてくれていて良かった。	幼小が連携することによる効果
・異年齢での支えあいについて、直接手助けするだけでなく、年上の子たちが、気を配ることができていたように思う。続く避難訓練でもまじめに真剣に取り組めていた。ついついフザケたりクスクス笑ったりすることがあるかもと思っていたけどみんな真剣だった。	
・幼小合同でしていただけたことで、もしもの時にも異年齢で助け合うこと等を体験できよかったと思う。	子どもたちが主体的に参加する効果
・体験している子どもだけでなく、周りで見ている子どもにも分かりやすいところも良いと思う。	
・子供たちがトイレに行く時間がなく、避難するまでの時間に少し余裕があれば助かる。	園児に対して、時間的ゆとりの配慮も
・園児にとっても実際に災害があった時の様々な場面を体験できて、イメージが少しできたかと思う。	
・幼・小が合同で地震防災教育をすることで、幼児もとても関心をもって話を聞き、内容を考えることができていた。	
・園児は園外に出る前にトイレの時間が必要なので、予定通りに進めてもらえると嬉しい。	
・避難アラートが休憩時間に発信される設定を事前のプレ避難訓練では子ども自身が考えて動くという体験ができて意義あるものだった。体験学習は何度やっても必要なことだと思う。ただ、体験学習で、子供から「楽しい」という声や笑顔が出ていたので、もっと事前指導で訓練のめあてをおさえておく必要があると感じた。	事前学習の必要性（事前学習不十分）
・各アトラクション前で「ここはゆらゆら壁だから、何を気を付けたらいいかな？」等の声掛けをすれば子供たちも自分たちで何を気にしたらいいか学びがより深まったと反省しました。	活動一つ一つの意味づけの明確化が必要
・体験において、設定時間が短かったこともあるのか、流れるように終わってしまったので、１つ１つの体験の前に担任からどういう場面を想定したものであるかを解説してあげられれば良かったと反省しています。	
・アトラクションを実体験する時、１つ１つの場の説明があれば良かった。（意味がわからずに通ってしまう子が居た為。）	
・避難の際、小学校の先生方にも積極的にお声かけしていくべきだと反省しました。	幼小の教諭間での意思疎通の必要性
・体験した内容を振り返ることができるパンフレット（プリント）等があったらより良いかと思った。	事後学習の仕方の工夫の必要性・提案
・小さい子にもわかりやすくてよかったと思った。今回は一度だけまわっただけだが、２回目やりたいという子がたくさんいて、一度目の振り返りをしてもう一度まわらせてみたらどうかと思った。	体験学習と事後学習のやり方の工夫の案

表５　小学生向けのアンケートの内容

小学生向け（2020年）　※１年生はいない	
問１	あなたの学年をお教え下さい。
問２	11/５の防災教室や避難訓練より前に、「地震」が起きたときのことを話し合ったことがありますか？（２択）
問３	「地震」について話したのはいつですか？（選択式）
問４	その時の内容はどのようなものでしたか？（選択式）
問５	あなたは防災教室に参加して、よかったですか？（２択）
問６	その理由や感想を教えてください。
問７	印象に残ったもの（アトラクション）はありますか？ある場合、その理由も教えて下さい。（選択式）
問８	防災教室について、家に帰ってから家族と話をしましたか？（２択）また、話をした人は、どのような話をしましたか？
問９	防災について、今後、学んでみたいことはありますか？あれば書いてください。
問10	その他、感想があれば、書いて下さい。

小学生向け（2021年）　※１年生を除く（２年生はいない）	
問１	あなたの学年をお教え下さい。
問２	昨年の防災教室には参加しましたか？（２択）
問３	昨年の防災教室から「地震」が起きたときのことを考えたり話したりすることが、増えましたか？（選択式）
問４	これまでに「地震」が起きたときのことを考えたり話したりしたときの内容はどのようなものでしたか？
問５	あなたは今年の防災教室に参加して、よかったですか？（２択）
問６	その理由や感想を教えてください。（昨年も受けた人は、２回受けてよかったことがあれば書いてください）
問７	防災教室について、家に帰ってから家族と話をしましたか？また、話をした人は、どのような話をしましたか？
問８	防災について、今後、学んでみたいこと、知りたいことはありますか？（２択）あれば書いてください。
問９	その他、感想があれば、書いて下さい。

３）児童へのアンケート

表５に児童向けのアンケートの質問内容を示す。ここでは、実施年によって内容がわずかに異なるため年毎に記す。回答結果全般で、防災教室に対して肯定的なものがほとんどで、「ためになった」「楽しかった」「防災について見直すきっかけになった」など実施内容に対して、よい印象が残ったようである。図７に示す2020年の問８と2021年の問７については、家庭への話の持ち帰りについての設問であるが、７割前後の児童が家庭で話したと回答している。この点は、６．１）の保護者アンケート図３での結果とも、対応する。子どもたちを通じて学校と家庭を繋ぐ役割として、家庭での対策強化に結び付けるためにもこの数字がより高いほうが理想である。表４にもあるように、より事後学習に力点を置いたやり方をすることによって、子どもたちにも今回の一連の活動への定着付けをサポートすることになり、それが家庭での会話に繋がると考えられる。

図８に2021年の問３の回答結果を示す。前年の防災教室の経験を経て、地震防災についての関心度の変化を問うたものであるが、「減った」「変わらない」という回答が６割強となった。逆に４割もの児童が増えたと回答している点は注目すべきことと捉えることもできるが、図７で示した家庭への話の持ち帰りの傾向と呼応させるためには、地震防災への印象の残り方を高めることで改善できる可能性がある。表６は、各年の児童による問４に対する回答（選択式・複数回答あり）を示したものである。児童の地震防災についての関心事を表すものであり、避難時のこと（避難ルートや持ち物）、身の守り方、津波のことが多かった。日常的に気にかけている事項といえ、こうした点をアドバイスできるような防災教室を組み込むことで、子どもたちのニーズを汲んだものになり得ると言える。また、一方、図９に2021年の問８についての回答および表７に今後学んでみたいことについて自由に記してもらった内容について示す。図９からは、今後学んでみたいことがあるかという問いの回答に対して、８割がないという結果であった。このことの考えられる理由は、「満足した」あるいは「思いつかなった」などと推察される回答ではあるが、残り２割にみる表７の今後学びたいこ

との中身をみると、いずれも災害を引き起こす自然現象についての記載が多く、「理科」的な内容を想起したものになった可能性はある。

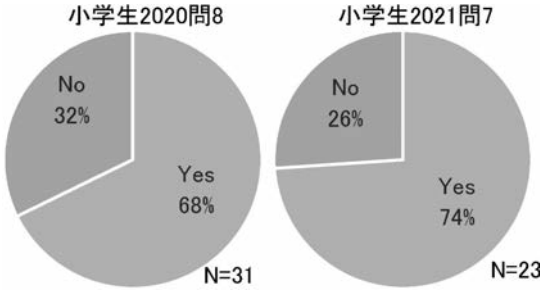

図７　2020年ー問８と2021年ー問７の回答結果

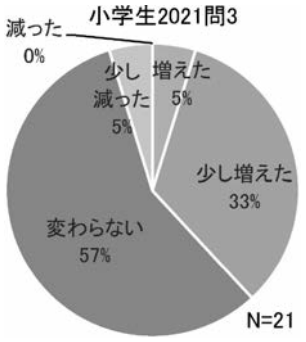

図８　2021年ー問３の回答結果

表６　2020年ー問４と2021年ー問４の児童による回答結果

2020年小学生

問４　その時の内容は？（複数回答あり）	
①避難訓練	9
②避難する場所や道の確認	14
③避難時の持ち物を考える	13
④近所の危険な場所を探す	5
⑤家具が倒れないようにする	7
⑥津波に気を付ける	11
⑦身の守り方	13

2021年小学生

問４「地震」が起きたときのことを話したりしたときの内容はどんなものか。	
①不安や心配などの気持ち	6
②身の守り方	15
③避難する場所や道の確認	13
④避難するときの持ち物	10
⑤家具が倒れないようにするなど家でできる対策	4
⑥近所の危険な場所	6
⑦津波が来た時について	14

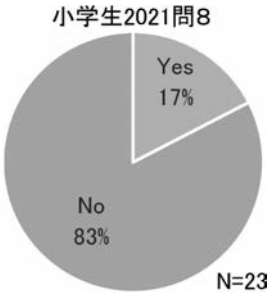

図９　2021年ー問８の回答

表７　今後学んでみたいことの記述

児童：2020年問９、2021年問８　［今後、学びたいことはありますか？］	
・どうして地震が起きた後津波が起こるの？ ・津波がどのくらいの高さになるのか ・どのくらい津波がくるか ・他にどんな地震が起きたときのことを知りたい ・私は近所の危険な場所を前もって調べようと思います。 ・地震にそなえるためのことについて学びたい	・地震について ・非常食について

表８　児童向けアンケート結果　自由記述より抜粋

児童らのコメント（自由記述） 2020年－問６、問10、2021年－問６、問９などから	
自分の身の守り方について改めて知れた げきを見ておちついたらいいっていうのがわかりました。 体のまもり方やたいけんをさしてもらって本当におきたときにどうすればいいか教えて もらえてうれしかったです。 命を守るためにできることを学ぶことができたから（よかった） 地震の危険さや怖さなどを改めて知れた 自分の身の守り方について改めて知れた 地震がどんな感じか、逃げ方を知れた 楽しく地震の勉強ができたから良かった。 もし地震がきたときにどうすればいいか学べて良かった。 対策する気持ちがでてきた すりるまんてんでたのしかった	できたこと、感想など
１年生のときよりも地震のことを詳しく知れたから良かった。 今年中に覚えられていなかったことを確認できた。 昨年も参加したけどもっと地震の怖さを知れたからです ２回目であまり覚えていなかったのでもう一度地震がどんなことかよく分かりました。 ちょっと忘れていたのでまたやれてよかったと思います。	反復実施による効果
劇やゆらゆら壁が楽しかったです。倒す側ややる側どっちもできたから	児童らを実施する側にした効果

そこで、こうした防災教室をきっかけに、教科と結び付け意欲的な学習に繋げるという面もあると考えられる。もちろん教科だけでなく、防災一般について知りたいという記載もあり、表６に示した内容と重なる点も見受けられる。

表８に子どもたちへのアンケートによる感想など自由に記入してもらった内容の一部を記す。児童らの感想は前述したように「学べてよかった」が多く、楽しく、実感を持って学ぶことの重要性があらためて汲み取ることができる回答であった。しかしながら、これらがどの程度身についているかの追跡や検証ができていない点は、今後の課題でもある。また、2021年の取り組みでは、以前実施した事柄について反復することによって、記憶の補強がなされ、防災教育にとっても重要な効果が現れていたとも言える。さらに、高学年生には防災教室を実施する手伝いをしてもらったが、この点は、受け身的な実践だけでなく、能動的な実践によって、子どもたちの意識や意欲を高めたと考えられる。上級生として学校での防災教育を教員と協働し低年齢の子どもに防災の担い手として引き継ぐ意識を高める効果も見られたと考えられる。

年に一回の行事であるにも関わらず、一連の防災教室と避難訓練のパッケージは、全般的には好評であっ

た。毎年の各回の活動から子どもたちの行動や考え方の変化をみることもでき、子どもたちが成長していく発達段階や過程に合わせ学びのねらいや役割を変えた防災教育の継続性が必要であることをあらためて認識させられた。

7．まとめ

この研究では、和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園で実施した「防災教室」と「避難訓練」の取り組み事例より成果を報告した。さらなる分析は必要ではあるが、実践後のアンケート等の集計結果の分析と考察をした。そのことから次のＡ～Ｃの

Ａ：一連の実践活動については、内容・質の向上を図ること、特に「振り返りを含む事後学習の充実」

Ｂ：学校･園独自でも展開できるようにすること（自立的展開と幼小連携の強化）

Ｃ：地震時対応訓練と津波避難訓練における改善点を抽出し反映させること

がそれぞれ必要であり、これらは、今後の課題・目標になろう。

また、防災教育の充実化を推進するにあたっては、保護者の防災に関する知らない・分からない点についての不安も考慮しながら、子どもたちを守るための取り組み実践を蓄積・継続し、家庭と地域で共有して取り組めるよう、新たな方向性についての議論を高め、新たな展開を目指したい。

謝辞

この実践においては、和歌山市立雑賀崎小学校校長・園長の奥村孝先生をはじめ雑賀崎小学校および幼稚園の先生方にお世話になりました。防災教室は、和歌山大学教育学部の学生さんたちのご協力を頂きました。また、この研究の一部は、JSPS科研費（19K02615）などの補助により実施されました。関係者各位に記して感謝いたします。なお、本稿の内容は、山田･丁子[7]で発表された内容をまとめたものです。

引用文献

1）防災教育実行委員会「防災教育チャレンジプラン防災教育事例集検索」，http：//www.bosai－study.net/search/search.php，2022-9-5閲覧.

2）文部科学省「文部科学省における防災教育の現状について（会議資料）」，令和３年６月23日，https：//www.mext.go.jp/kaigisiryo/content/000121137.pdf，2022-9-5閲覧.

3）山田伸之･丁子かおる「防災保育実践における成果と分析－過去10年間の保育者･保護者アンケートの分析から－」,『和歌山大学教育学部紀要』，2021，第72号，79-84.

4）国土地理院「地理院地図 電子国土Web」，https：//maps.gsi.go.jp/，2022-9-5閲覧.

5）和歌山市危機管理局危機管理部,『雑賀崎地区津波避難計画（平成28年３月）』，2016，16頁.

6）和歌山市「要緊急安全確認大規模建築物の耐震診断結果の公表」, 令和４年５月９日, http：//www.city.wakayama.wakayama.jp/kurashi/sumai_jyougesuidou/1001110/1010370/1018733.html，2022，16頁，2022-9-5閲覧.

7）山田伸之・丁子かおる「小規模校・園合同の地震防災教室および訓練の実践について」,『日本地球惑星科学連合2022年大会』，2022，G01-P01.